

# マダム貝聞録

No.2 フィジーの教育事情 藤井由佳(協同総合研究所)



Bula! 今回から数回にわたって、フィジーの教育事情を伝えていきます。まず私が勤務していた現地の高校の紹介から。

私の赴任校、ナンドロガ・ナボサ高校 (Nadroga Navosa Provincial High School) は、フィジーで有数のリゾート地として知られるシンガトカ (Sigatoka) という地方都市から、ナンディ (Nadi) に向かって車で15分程のところにあります。隣には日本人観光客もよく訪れる「フィジアン」という大きなホテルが建っています。学校から海へは徒歩3分。教室の窓からは、珊瑚礁を境に濃いブルーとうすいブルーに色分けされた海を臨むことができました。Form 3 (中学3年) から Form 6 (高校3年) の4学年があり、全校生徒約200人、教員数約20名の国内では比較的小規模な学校です。生徒の大部分は近くの村から徒歩、あるいはバスを利用して通学してきますが、家が遠くて通えない生徒は、校内にある寮で生活します。校内には教員用の住宅も何軒があり、私はそのなかの一つを与えられて住んでいました。朝は太陽が昇ると同時に起き、夜は寮生の消灯とともに就寝という生活でした。



## フィジーの教育事情

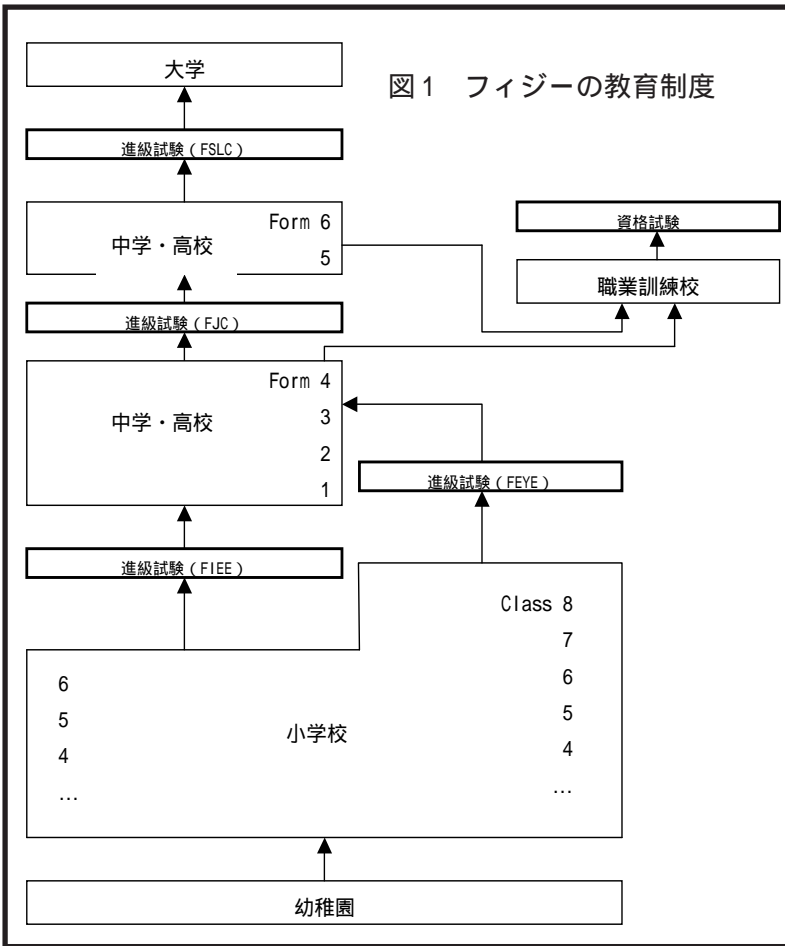
### 小学校

小学校は6年制の学校と8年制の学校がある。小学校に入学する年齢は規定されていないが、6歳で入学するのが一般的である。小学校修了時に中学校・高校へ進学するための試験がある。試験科目は英語、算数、理科、社会と選択2教科の合計6教科600点満点で、半分の300点以上得点すれば合格で

ある。また、不合格の場合は留年し、翌年、試験に再度挑戦することになる。従って各学年の児童や生徒の年齢は様々である。

### 中学校・高校

Class 6 (小学6年) 修了者は Form 1 (中学1年) へ、Class 8 (小学8年) 修了者は Form 3 (中学3年) へそれぞれ入学する。Form 7 修了後、大学へ入学する。Form 7 は中学・高校というより、大学の基礎コースの



性格が強い。Form 4修了時にFJC(Fiji Junior Certificate)、Form 6修了時にFSLC(Fiji School Leaving Certificate)に合格しなければ進級することができない。何度挑戦しても合格できなかったり、経済的に余裕がなかったり、勉強に興味をもてなくなってしまうと生徒は学校から離れていく。FJCとFSLCの受験科目は図2と図3のとおりである。

また、大学へ進学するのはほんの一握りの生徒である。フィジーには首都スバに南太平洋大学があり、学生はフィジー国内に限らず南太平洋の様々な国から集まってくる。国際色豊かな大学である。

### 授業料

フィジーの義務教育はClass 1(小学1年)からForm 4(高校1年)であり、その間の授業料は政府が負担している。しかし、完全に無償ではなく、施設費や教科書代、技能教科にかかる費用、コンピューター導入費など様々な費用を学校は徴収していて、それらはすべて保護者負担である。そのほか制服、筆記用具、靴、昼食など学校で必要なものはすべて自分で揃えなくてはならず、子どもの多い家族は経済的に大変である。また、義務教育とは言え、試験に合格しなければ進級できないので、途中で辞めざるを得ない生徒もたくさんいる。私の赴任校の料金は非常に安いことで有名であったが、それはつまり、学校の学力レベルも低いということであった。フィジー国内の学校は進級試験の結果によって最上位から最下位までランク付けされている。生徒は自分の学力に合わせて学校を選ぶが、必然的に優秀な生徒は学費が高くて良い学校に入りたがり、優秀ではない生徒は学費の安い学校に収まる。

ナンドロガ・ナボサ高校の料金は学年によって異なるが、年間約F\$100(F\$・・・フィジードル、F\$1 = 約60円なのでF\$100は6000円)であった。これでも払えない家庭はたくさんあった。しかし授業料が高い学校は年間約F\$600かかる。フィジーの平均月収は約F\$800。低所

図2 FJC受験科目

必須科目	選択科目(2科目)		
英語	木工	フランス語	秘書学
数学	農業	ヒンディー語	会計
理科	製図	ウルドゥ語	金工
社会	フィジー語	家庭科	経済

600点満点で300点以上が合格

網掛けはナンドロガ・ナボサ高校で履修可能な教科

図3 FSLC受験科目

必須科目	選択科目(3科目)		
英語	数学	製図	コンピューター
	生物	物理	速記
	経済	地理	化学
	商業	会計	歴史
	工学	農業	フィジー語
	タイピング	木工	フランス語
	食物栄養	被服	ヒンディー語
			ウルドゥ語

400点満点で200点以上が合格

網掛けはナンドロガ・ナボサ高校で履修可能な教科

得者層は月にF\$200も稼げないというから、子どもは大抵一人ではないし、授業料の支払いは大きな負担である。苦肉の策として、一番賢い子を良い学校に通わせ、ほかの子どもたちには安い授業料で我慢させている家もある。

図4 学校の1日

登校	8:00
朝の会	8:15 ~ 8:30
1時間目	8:30 ~ 9:10
2時間目	9:10 ~ 9:50
3時間目	9:50 ~ 10:30
休憩	10:30 ~ 10:50
4時間目	10:50 ~ 11:30
5時間目	11:30 ~ 12:10
6時間目	12:10 ~ 12:50
昼休み	12:50 ~ 13:15
清掃	13:15 ~ 13:25
7時間目	13:30 ~ 14:10
8時間目	14:10 ~ 14:50
9時間目	14:50 ~ 15:30

### 学校の運営団体

学校はそれぞれ独自の運営団体によって運営されている。地域の人々によって運営されている場合、理事はその地域の有力者であることが多い。

#### 政府直営の学校

政府から運営資金が供給されている学校。実際の運営は学校がつくった委員会が行う。財政的に恵まれており、教育水準が高いが授業料も高い。

#### 教会によって運営されている学校

メソジスト教会系・・・メソジスト教会系の学校の理事は、その地域のメソジスト教会の関係者であることが多い。カトリック教会系の学校と異なり、中央のメソジスト教会の関係者は理事になっていない。そのため、学校運営が地域に密着してくるため、あまり経済的に豊かでない学校が多い。

カトリック教会系・・・フィジーのカトリック教会の司教総代理とカトリック教育長がすべてのカトリック教会系の学校の理事になっている。その他の理事は地域の教会関係の人であることが多い。カトリック教会系の学校はそれぞれの教会区を持っており、そこから寄付が集まるため、経済的に豊かな学校が多い。

#### 地域が運営する学校

主に地域の人が委員会を構成して学校運営にあっている。そのため、経済的に非常に苦しい学校が多い。ナンドロガ・ナボサ高校はこのタイプの学校である。

### 学期

学校は3学期制であり、日程は教育省によって決められている。

例：2002年の各学期日程

1学期：14週（1月21日～4月26日）  
学期休み2週間

2学期：14週（5月13日～8月16日）  
学期休み2週間

3学期：13週（9月2日～11月29日）  
学年末休み7週間

#### 教員の雇用形態

公務員・・・教育省によって雇用される。給料の全額が教育省によって支払われる。

臨時公務員・・・1年あるいはそれ以下の期間、教育省によって雇用される。

学校補助金によって雇用される教員・・・オーストラリアやニュージーランドからの補助金で賄われている教員。

正規公務員は非常に少なく、全体の50%ほどしかいないように思われる。これはフィジーの財政が厳しく、教員の給与を十分に確保できないことが原因である。地方の学校では教員不足も発生しているが、それは、教員になり得る人材が不足しているのではなく、公務員の雇用が増えないからであった。教員養成校の卒業生が新学期になっても勤務先を見つけることができないということがここ数年は起きている。また、現地の人間でも生活に不便な地方や離島には赴任したがらず、都市で勤務することを希望する人が多い。都市と地方の両極分化は広がるばかりである。

#### 教育関係機関

CDU(Curriculum Development Unit)

小学校および中学・高校のカリキュラムの作成などを行っている。また、各教科に関する教育活動の促進や援助を行っている。

- ・ 指導要領の作成

- ・ 教科書、補助教材の作成。
- ・ 教員研修の実施
- ・ 学校備品の充実(教科書や実験器具などを学校に配布する。)
- ・ 学校訪問

学校訪問というのは、年に一度、CDUの職員が各学校を訪問し、評価やアドバイスをすることである。この訪問の際、授業の年間計画、授業の進捗状況、生徒のノートチェックなどが行われる。最終的には共通進級試験の受験資格が学校に与えられる。学校がきちんと運営されていない場合は受験資格を失ってしまい、生徒は一年間を棒に振ることになる。そのため、CDUの訪問は教師にとって年に一度の大イベントと言ってもいい。訪問日が近づくとの教師も生徒を遅くまで学校に残し、それまで遅れていた授業を取り戻そうと必死になる。なかには授業計画が白紙のままの教師もいて、連日徹夜で仕事を続ける。私はこれを見て、「フィジー人も働こうと思えば働ける」ことを確認した。しかし、あまりの忙しさに体がついていかなかったのか、もしくは受験資格を与えられたことに安心したのか、CDUの訪問後、倒れてしまった教師もいた。

#### 教員組合

フィジーには次の2つの教員組合がある。  
Fiji Teachers' Union (FTU) 主にインド系の教員が構成員

Fiji Teachers' Association (FTA) 主にフィジー系の教員が構成員

教育省の職員や校長を含め、ほとんどの教員がどちらかの組合員となっている。

## 番外編：赴任した頃の話

忘れもしない、2002年1月21日。ナンドロガ・ナボサ高校に赴任した最初の日である。首都スバでの現地訓練を終え、新学期の始業式前に行われる職員会議に合わせて赴任。緊張のあまり詳しいことは覚えていないが、開口一番「Bula!」とだけ言って、にこっと笑ったのはいいが、ほかのことは何も言えなかった気がする。とにかく私はあまりにも英語に自信がなかった。そのときは気がつかなかったが、どの教員も初めの頃は、私にゆっくりと話すことを心がけてくれていたようだ。

ひととおり学校の様子を紹介されたあと、いよいよ私の家へ。いったいどんな所に住むのかと、日本でもいろいろな方に心配していただき、家族ももちろん心配し、私も気になっていた「家」。校長先生に連れられて、日本人コーディネーターに付き添われていざ出陣。第一印象は「山小屋」。壁は木造で屋根はトタン。床はコンクリート。中に入って一番に目にしたのは鉄パイプで作られたベッド、そしてその上に置いてある、見るも無残なぼろぼろのマッ



藤井由佳の家

ト。マットというよりスポンジ。そのスポンジの中では蟻のような生物がうようよ動いている。「こ、これで寝るの？今日？」と思った。窓はルーバー（鎧戸）でカーテンもないし、床はコンクリートむき出し、台所の木材は腐っていて水道から水は出ない。トイレとシャワー室は外にあって、トタンで作られた簡易的なもの。トタンは錆びていて穴がたくさん開いている。コーディネーターはこの時の私の様子を後にこう語っている。「すごい顔してたよ。声かけられなかった。でも、心を鬼にして藤井さんをあの部屋に置いていった。」

そんなわけで一人残された私は、それから何をしたのか本当に覚えていない。しかし、意識が戻った頃には、校内に住む同僚の教員の家族と一緒に暮らしていた。彼らの家で食事し、寝起きし、毎日学校に行った。そのうちに、校長先生は私の家を改修する手配をしてくれた。壁にペンキが塗られ、ベッドは少し程度の良いものに替わり、カーテンがどこかからか持ち込まれ、シャワー室の穴も埋められた。そして1ヶ月後、めでたく私は自分の家で暮らすこと

ができるようになった。それにしても、あの家族がいなかったら私はいったいどうなっていたんだろう。感謝、感激、あめあられである。

しかし、自分の家で暮らせるようになった喜びもつかの間、すぐに家に住みついている虫との闘いが始まった。蟻、蚊、蜘蛛、蛾、ゴキブリ、ヤモリ、ネズミ、そのほか名前も知らない虫、虫、虫。「家」に好ましくないものがたくさんいる。壁は隙間だらけなのでどこからでも外と行き来ができ、部屋の床を悠然と横断している。ときどきヤモリがキッキキッと鳴き、ネズミがごそごそ音をたてる。いくら退治しても一向に減る様子はない。見ているだけで体がかゆくなっていたそんなある日、蚊帳をつけたベッドに横になって天井を見ていると、ヤモリがいつものように電灯の近くでくつろいでいた。あの小さな体でよくあんな声が出るよ、まったく、と思っていると、そのヤモリが驚くほどの速さで何かを捕らえた。虫に食いついたのだ。ヤモリは鳴くだけだと思っていたのに、きちんと虫退治という仕事をして



シャワー



トイレ

いるではないか！私はヤモリに親近感を覚え、さらにほかの虫たちにも寛容になった。蟻もよく見てみるといろいろな大きさのものがいて、それぞれ役割が違う。おいしいものはないかと常にパトロールをしている身軽な蟻もいれば、獲物を見つけたときに通り道をつくる体の大きい蟻もいる。冬眠するほど寒い冬がないフィジーで暮らす彼らは一年中働いている。そんなことを考えながら、私は虫を無理に退治するより、彼らとの「共存」を選ぶことにした。そうするとヤモリは、虫を退治すると同時に、必ず天井から糞のプレゼントをしてくれた。



Sota tale. (ソタタレ…また会いましょう。)